

新生児メレナ発生頻度に関する疫学的調査

東京厚生年金病院産婦人科

松 山 栄 吉

わが国の新生児メレナの発生頻度を知る目的で、東京都区内の5病院について調査を行なった。これらの病院は、いずれも従来は新生児全員に対するビタミンKの予防的投与は行なっていなかった施設である。

研究 方 法

東京都区内の葛飾赤十字産院、慈恵医大青戸分院、三楽病院、浜田病院、東京厚生年金病院の5病院について、昭和55年より同59年の5年間の分娩例の中で、新生児メレナと診断された症例を選び、それぞれの症例について分析を行なった。

新生児メレナには真性メレナと偽性メレナがあるが、本調査では明らかに偽性メレナと診断されたものは、除外するよう努めた。しかし新生児メレナの診断は、施設により、あるいは症例により、必ずしも共通した検査が行なわれていないため、臨床所見や経過を参考にしたものもある。

成 績

5病院の集計の成績は、次のようであった。

1) 新生児メレナ発生頻度(表1)

全分娩数に対する発生頻度は0.134%であり、分娩746例につき1例の割合で発生していた。

2) 本症例出生時の母体の妊娠期間(表2)

妊娠30週、36週の各1例を除き、正期の妊娠37~41週に集中しており、妊娠期間との関連性はとくに認められなかった。

3) 新生児メレナの出生体重(表3)

低出生体重の2例は妊娠30週、37週の症例であり、出生体重との関連性は認められなかった。

4) 新生児メレナの出血症状(表4)

吐血、下血、両者の合併から、それぞれ同数にみられた。

5) 新生児メレナの発症日(表5)

大部分が生後0~2日の発症である。生後9日の症例は、妊娠40週、児頭骨盤不均衡による帝王切開例で、吐血と下血の合併例であった。

6) 新生児メレナの治療(表6)

大部分はビタミンK₂の筋注であるが、K₂にさらに輸血を併用した症例が7例あった。

いずれの症例も治癒し、死亡例はなかった。しかし輸血を必要とするような重症例も約1/4にみられたことは重要なことである。

ま と め

新生児メレナの疫学的調査によって、0.134%、すなわち分娩の746例に1例の割合で発生していた。いずれもビタミンK₂注、あるいはそれに輸血を併用することによって、全症例を治癒しえた。

もし、出生直後のビタミンKの予防的投与により、これらの発症を防ぐことができれば、その意義は高く評価されよう。

表1 新生児メレナ発生頻度

全分娩数	新生児メレナ数	発生頻度
20,141	27	0.134%

表2 新生児メレナの母体の妊娠期間

妊娠週数	例数
30	1
36	1
37	4
38	4
39	8
40	6
41	3

表3 新生児メレナの出生体重

出生体重	例数
1,000~1,999g	1
2,000~2,499	1
2,500~2,999	11
3,000~3,499	12
3,500~3,999	2

表4 新生児メレナの出血症状

出血症状	例数
吐血	9
下血	8
吐血+下血	10

表5 新生児メレナの発症日

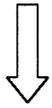
発症日	例数
生後 0日	6
1	14
2	4
3	1
5	1
9	1

表6 新生児メレナの治療

治療内容	例数
K ₂ 1mg 注	2
1.5	1
2	10
3	2
4	3
6	1
8	1
K ₂ 2mg+輸血 20ml	} 各 1
2 + " 80ml	
5 + " 20ml	
6 + " 70ml	
8 + " 55ml	
8 + " 60ml	
14 + " 100ml	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



まとめ

新生児メレナの疫学的調査によって、0.134%、すなわち分娩の746例に1例の割合で発生していた。いずれもビタミンK2注、あるいはそれに輸血を併用することによって、全症例を治癒しえた。もし、出生直後のビタミンKの予防的投与により、これらの発症を防ぐことができれば、その意義は高く評価されよう。